
【報告】

活動報告：『差異と反復』出版 50 周年記念特別企画「『差異と反復』の過去・現在・未来」

内藤 慧

2018 年はジル・ドゥルーズの主著の一つ、『差異と反復』(*Différence et répétition*, PUF, 1968.)の出版年からちょうど 50 年の節目の年であった。DG-Lab では読書会の年間テーマをこの『差異と反復』という著作に定め、計 6 回の研究会を開催するとともに、その成果をより広く公開するとともに、今一度この著作について改めて議論を深め共有することを目的として、50 周年記念特別企画として「『差異と反復』の過去・現在・未来」と題した研究会を企画・開催することとなった。年間を通じての研究成果を示すべく、DG-Lab からは得能想平氏(大阪大学)が研究発表を準備する一方で、『差異と反復』ならびに同書の二次研究のこれまでと、これからを考える同企画の性質を鑑みて、本邦における『差異と反復』研究の土台たる全訳という快挙を成し遂げた財津理先生にお話をいただく運びとなった。以下に 12 月 8 日に開催された特別企画に関して、財津先生のご講演、得能氏の発表の概要などを整理した報告したい。

1. 得能想平「ドゥルーズの差異の概念について」

得能氏の発表は『差異と反復』という著作において前景化したドゥルーズの差異哲学を巡って、まさに差異の概念それ自体について、『差異と反復』より以前の時期に書かれたモノグラフや、フランスにおける同時期の哲学史研究に注目しつつ解明を試みるものであった。得能氏が注目するのは、『差異と反復』よりも以前

に書かれたドゥルーズのベルクソン論「ベルクソンにおける差異の考え方」(*La conception de la différence chez Bergson, in L'Île déserte et autres textes (1953-1974), Édition préparée par David Lapoujade, Minuit, 2002.*)において提示された「差異の哲学」という構想である。得能氏はまずその典拠を、ドゥルーズに影響を与えた哲学史家マルシャル・ゲルーの『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』において紹介された、独自の「微分」概念を背景とする差異の哲学としてのマイモン哲学の内に見出す。そして、ゲルーのマイモン読解を精緻に検討しつつ、特に「自由」の概念を巡るゲルーの議論をベルクソン論におけるドゥルーズの「自由」論と比較することを通して、「差異の哲学」という構想の変遷を辿り、ゲルーのマイモン読解からドゥルーズのベルクソン論、そして『差異と反復』へと、「差異の哲学」にどのような拡張が為されているのか明らかにすることが試みられていた。

『差異と反復』読解の下準備として、単により以前のベルクソン論を参照するというだけでなく、当時の哲学史研究の状況を鑑みてゲルーのマイモン研究にまで視野を広げる研究は得能氏に独自の視点であり、『差異と反復』研究の新たな展開を示すものであった。質疑の中では、特にドゥルーズのベルクソン論、そして『差異と反復』における「縮約」の概念理解を巡って議論がなされた。



2. 財津理先生『差異と反復』の独自性とそれ以前の諸作品—精神分析の視点から—

財津先生のご講演は、『差異と反復』という著作を、ヒューム論『経験論と主体性』から始まる前期のドゥルーズのキャリアから振り返って検討し、「差異と反復」という構想を、極めて初期からドゥルーズ哲学に通底するものとみなした。ドゥルーズは『差異と反復』を書き上げる以前に、ヒュームやベルクソン、ニーチェ、カントといった哲学者に関するモノグラフを著しているのだが、このモノグラフについて財津先生は、これらの哲学者研究を通して「差異と反復」という構想が形作られたというよりはむしろ、既に初期の段階からドゥルーズ自身の内にあった「差異と反復」という構想をもとに、各々の哲学者の読解がなされたのではないかと、という見解を示した。そしてそれゆえにこそ、『差異と反復』という著作は難解ではあるが、十分にそれ自体のみから理解され得るものと主張した。『差異と反復』のベースとなる構想が、必ずしも彼の参照する諸議論の研究に依存しているのではない、という主張の一つの根拠として、財津先生はドゥルーズと精神分析との関係に焦点を当てた。

ドゥルーズが精神分析を重点的に扱っている著作は『マゾッホ紹介』、『差異と反復』、『意味の論理学』の3作品であり、これらは1967~1969年の間に立て続けに刊行されたものである。フロイトに対する言及自体は1953年の『経験論と主体性』の内に既に見出されるが、財津先生によれば1962年の『ニーチェと哲学』におけるフロイトへの言及こそが、ドゥルーズによるはじめての独創的なフロイト読解である。この『経験論と主体性』と『ニーチェと哲学』の間の期間（1954~1961）は「空白の8年間」とも呼ばれる時期であるが、財津先生はこの8年間の内に

ドゥルーズはフロイト研究を進展させたと仮定し、対してそれ以前からあるドゥルーズの構想自体には精神分析が関わっていないからこそ、ガタリとの共著において精神分析批判の態度をとることも可能であったのだと仮説を提示した。

ご講演の内容は多岐に渡り、紙幅の都合上全てを要約することは難しいので、以下いくつかの論点をまとめる。

・1967年の『マゾッホ紹介』において、ドゥルーズは既にバツハオーフェンの議論を背景としてラカンを批判しており、このバツハオーフェンから、ルイス・モーガン、そしてエンゲルスという系譜の先に『アンチ・オイディプス』という著作が位置付けられているという指摘。共著以前の『マゾッホ紹介』がバツハオーフェンに依拠した精神分析を展開する時、既にドゥルーズの内ではエンゲルスまでの系譜が念頭に置かれていたのではないかと、財津先生は仮説を提示した。

・『差異と反復』という著作は明らかにハイデガー哲学からの影響を被っている。ハイデガーの『カントと形而上学の問題』は『差異と反復』第4章において問いと問題の関係を巡って引用されるが、財津先生はVéronique Bergen, *L'ontologie de Gilles Deleuze, L'Harmattan*, 2001.に言及しつつ「時間の総合」論の背景にこの著作の存在を指摘する。ハイデガーはカント『純粋理性批判』「演繹論」における3つの総合論（覚知、再生、再認）に、現在・過去・未来の表象能力を見出しており、ドゥルーズの「時間の総合」論はこれをそのまま踏襲するものではないものの、影響関係が指摘される。財津先生が特にハイデガーとドゥルーズの時間論の差異として指摘するのは、未来の捉え方についてであった。



3. エピソード／全体討議

ご講演の後、財津先生からは『差異と反復』の翻訳作業や、『差異と反復』邦訳版「解説にかえて」にもあるドゥルーズへのインタビューを巡るエピソードを披露していただいた。例えば、有名な vice-diction 概念を巡るエピソードがあった。この vice とは vice-admiral 副将・中將の vice であるが、ドゥルーズはさらにこの vice-diction について、vice contradiction であり、かつ à la plus de contradiction である、と財津先生に語ったそうだ。

つまり、ドゥルーズにとって vice-diction の概念は、ヘーゲル的な contradiction に取って代わるもの、として構想されていたということである。その他にも財津先生を迎え入れるドゥルーズについて、その人となりを想像させるような温かいエピソードなども教えていただいた。

全体討議においては、フロイトや現象学、さらにはヘーゲルと、ドゥルーズとの関係を巡って、そして『差異と反復』におけるコラージュ的な記述スタイルを巡った議論などが交わされた。



4. 総括

財津先生、得能氏の両者ともに、『差異と反復』という著作を巡ってそれ以前の著述活動、そしてドゥルーズが影響を被ったであろう哲学的文脈にまで視野を広げて研究を遂行していることは、『差異と反復』という著作への分析・研究の進展を物語っていると言えるだろう。それはもちろん、テキストに外在的な典拠に単に依拠するというのではなく、あくまでテキスト内在的な理解を助けるものとしてこれらの典拠を利用するということである。このような両者の研究態度は、『差異と反復』の建設的な註釈研究を遂行しようと目論むわれわれ研究者にとっても、そして

この著作の魅力に惹きつけられる一般読者にとってさえ、確かな道しるべとして映ったのではないだろうか。

『差異と反復』という著作の形成を巡った様々な参照項を用いながら、最先端の研究成果、知見を共有するとともに、改めてこの著作の価値と今後の研究展開の豊かさを示すことで、当企画は『差異と反復』の過去・現在・未来』という企画タイトルに合うものとなったと言えるだろう。最後に、当企画のために貴重な時間と体力を傾け、われわれに『差異と反復』という著作の魅力、その研究の展開可能性を提示してくださった財津先生に改めて深く感謝の意を表することを以って、当報告の終わりとした。